



会議室での盛り付け作業。

# 延べ472人で5,918食 3カ月間の弁当作りボランティア

## いわて生協

いわて生協では、被災地のための弁当作りが5月から7月までの3カ月間続けられた。組合員や一般から応募したボランティアの人たちが、毎週2回、200食から多い時には500食を超える弁当を作り、3時間弱かけて沿岸部に運んだ。その活動の様子を追った。

毎回違う段取りで  
多い時には550食を作る

5月10日から7月26日まで、いわて生協では被災した人たちのための弁当作りボランティアが行なわれていた。

現在、仮設住宅への入居がほぼ終わり、被災地では新しい生活が始まった。だが、5月当時はまだ避難所でのくらしが続き、食生活は単調になりがち。また、避難所で食事を作り続ける人にも疲労がたまっていた。

「少しでもバランスの取れた食事をしてほしい。働きづめの人に休んでほしい」

そこで、いわて生協の組合員をはじめ、一般から応募したボランティア参加者は、毎週2回、20人程度が盛岡市内のいわて生協の施設に集まり、午前中いっぱいかけて弁当を作った。その後、被災地である

沿岸部へ運ぶ。作る人も運ぶ人も、すべてボランティアだ。

米は岩手県農民連から提供されたもので、他の食材はいわて生協の募金で購入した。また、生協と取引のある企業から提供されたものもある。

「いつも野菜を多くと心掛けています。特に今日は肉や魚も豊富に入れて栄養のバランスを考えました。皆さんが家庭で食べているように味わっていただければと思います」

7月21日、盛岡市内のいわて生協・天昌寺組合員センターに集まったボランティア参加者を前に、メニューを説明するのは、いわて生協・盛岡西コープの委員、増田都子さんだ。

この日のメニューは、サケの野菜甘酢あんかけ、鶏肉とインゲンのごまあえ、カボチャとレーズンの甘煮、トマトとうずらの卵のドレッシングあえ、豚のシウワガ焼き、



盛岡西コープの委員、増田都子さんが今日のメニューを図解で説明。



盛り付け前にうちわで野菜を冷ますのも一仕事。  
全員、真剣な面持ちで作業する。



そして、しば漬け。

作るのは250食。増田さんは、「味を統一させるのが難しい。また、作ってから口に入るまでかなり時間があるので、食中毒などを絶対に起こさないよう、衛生面には特に気を付けています」と言う。

9時から調理室で作業がスタート。グループに分かれて、250食分の野菜を切り、炒め、煮込み、味付けをしていく。「何かしたいと思っていましたが、現地へ行くこともできず、盛岡でできることをとボランティアに参加しました。毎回、違うメンバーで、もちろんやることも段取りも違う。『次は何をしましょうか?』といつも聞きながら仕事を進めています。と、自ら仕事を見つけてるつもりで続けていると語るのは、ボランティアの一人、佐藤美代子さんだ。

「いわて生協が牛丼の炊き出しをやっていた4月から(ボランティアに)参加してきました。今日は全部が手作りで大変ですが、550食作ったこともありまますから、今日はまだ楽なほう」と笑うのは、この日唯一の男性参加者、吉田克彦さんだ。

## 3時間かけて沿岸部へ いくつもの避難所へ送り届ける

その後、盛り付けを行ない、弁当は午前中いっぱい完成。シッパーに詰め込み、トラックへと運ぶ。運転するのは細川健美さんだ。

「大槌町の実家は幸い大丈夫だったんですが、親戚や友人には被害に遭った人が大勢います。少しでも役に立ちたいと思い、当初からいろいろボランティア活動をしてきたのですが、沿岸部に土地勘があるので役立てるのではと思い、参加しました」。

午後1時前、弁当を作り終えた参加者に見送られながら出発。それから約2時間半、沿岸部へ向けて山道を走り、3時半過ぎに、最初の配達先、大槌町麻打直の集会所に到着。細川さんは手際よくシッパーをトラックの荷台から取り出すと、集会所まで運んで応対に出た女性に手渡す。

次に向かったのは大槌町桜木町。この地区のこぶ委員、東谷陽子さんの自宅だ。平穏な住宅地に見えるが、人の背丈ほどの津波が押し寄せ、どの家も1階部分に大きな損傷を負った。食料品を買いえる店は流され、東谷さんも、仕事で隣町に出たついでに1週間分の商品を買いためするという。自動車を運転できない高齢者にとっては深刻な問題だ。

午後4時過ぎに着いたのが小槌神社。

社。女性2人が出てきて、「ありがとうございます」と受け取る。その後は大念寺へ向かったが、途中、焦げ跡の生々しい大槌小学校を通り抜けた。震災と津波で大打撃を受けた大槌町は、3月11日の夕方から大規模な火災にも見舞われた。大槌小学校の壁面には今なお、黒煙の跡がくつきりと残っている。

## 喜んでくれる人がいるから ボランティアを続けられる

大槌稲荷神社には一時、130人近い避難者がいた。5月後半から、いわて生協からの弁当が届くようになると、特に喜んだのが子どもたちだったという。ハン



無事完成。配達に行く細川さんを、ボランティアのみんなで見送る。

パークやロッケが人気だった。盛岡との往復を含めると、1日がかりの仕事になるが、細川さんは、「たくさんの人が喜んでくれるので、続けられます」とまったく苦にしない。

被災地には多くの義援金が集まり、支援物資が届く。お金は食材やガソリンに換え、食材は弁当に加工して、はじめて困っている人の役に立つ。丸1日を費やして必死で運ぶ人がいて、はじめてその善意は届く。

このボランティアには延べ472人が参加し、3カ月間で計5,918食の弁当が被災地へ送り届けられた。

(文・写真 山本明文)



避難所の大槌稲荷神社に弁当を運び込む細川さん。